

312) マネージャー

私の親友の写真家の先生が、然ることがきっかけで、タレントクラブを始めるハメになってしまいました。タレントとはといえば、舞ちゃんという20歳の女の子たった一人で、マネージャーはこれも何処からか、急遽連れてきたアルバイトのオジさんで、通称ジッチャマと呼んでいました。まっ、言ってみればシロクマ広告社みたいなもので、ナニもカモ、泥縄なのでありましたが、舞ちゃんは歌も歌える、頭も切れる、その上顔も奇麗で、結構仕事も入ってきました。ところがある日、ジッチャマの実家に不幸があつて、舞ちゃんを名古屋のテレビ局や広告代理店に連れて行く人間がいなくなつてしまいました。そこで白羽の矢がたつたのが小生というわけで、朝早く起きて新幹線で名古屋入りとあいなつたのであります。名古屋でまず最初にタクシーに乗って行ったところは、ナンと我輩が勤務する会社の名古屋支社でした。困ツチツタなー、知ってる奴に会つたらどうしようと思つて、緊張して行つたのであります。制作局に行くとき出てきた男は我輩の全く知らない人で、ひとまず安心したのであります。帰り際に、「オ～山田じゃないか！」と声をかけてきたのは、我が同期入社の中田ではありませんか。一瞬ドッキリだったのですが、「イヤ～ちよいと出張なんだけど、日帰りで忙しいんだ。」と、逃げるように次のテレビ局に急いだのであります。ところがテレビ局では、どんな番組に出ているのかとか、どんなコマーシャルに出ているのかとか、いろいろ聞かれるわけでありまして。エーと、アノー、「舞ちゃんナニに出たんだっけ」と、ま～情けないこと。一日にしてならないのは、ローマだけではありやせんぜ。マネージャー業なんつうのも“一日にしてならず”でありやした。